

KUMAGAI UPDATE



熊谷組グループの災害復旧対応
「令和6年能登半島地震・奥能登豪雨」

いかなる難工事にも全力で挑む 令和6年 能登半島地震・奥能登豪雨への取り組み

熊谷組グループの災害復旧対応

令和6年(2024年)1月1日16時10分、

石川県能登半島北部でマグニチュード7.6の地震が発生し、奥能登地区を中心に最大震度7を、広いエリアで震度6弱～6強を記録した。

大規模な土砂崩れや液状化現象が多発し、沿岸部では堤防被害や最大4mに及ぶ地盤隆起が発生した。

珠洲市では住宅の約半数が全壊、輪島市では大規模火災も発生し約240棟が焼失した。

また広域にわたって生活・社会インフラ設備に壊滅的な被害が発生。

特に主要幹線道路の寸断により救援や物資輸送が難航し、復旧作業を困難なものにしていた。

道路・ライフラインの復旧がようやく進んできた矢先の9月21日、

能登地区において線状降水帯が発生し、豪雨という再びの災害に見舞われ被害が深刻化した。

そうしたなか、熊谷組は地震発生直後から震災対策本部を設置し、DXツールなどさまざまな最新技術を導入するなど、被災地の啓開工事を迅速に推進。

また豪雨被害のあった奥能登では土砂撤去や流木撤去、仮設橋の設置など応急復旧作業を行い、一日も早い復旧復興に全力で挑んできた。

今回、能登半島地震・奥能登豪雨における熊谷組グループの災害復旧対応について紹介する。

地震直後に震災対策本部を 設置し、救援ルートを確保

熊谷組は地震発生当日、直ちに（震災対策本部）を北陸支店に設置した。その日の様子を木下剛北陸支店長はこう振り返る。

「元日の夕方でしたが、第一に社員およびその家族の安否を確認しなければと思い、真っ先に支店に向かいました。安否確認後は徐々に自分自身も冷静になり、地域の安全と復興に対する責任を強く感じました。そこで、まず迅速に現場の状況を把握すること、そして被災者のニーズに応えるための支援体制を一刻も早く整えることが重要だと考えました」

またこの時、あらためて建設業界としての役割を再認識したという。



北陸支店長 木下 剛

こうして熊谷組は、震災直後から被災地の建設現場やお客様はもちろん、周辺地域の被災者および被災状況の調査に動いた。しかし主要な交通網が断たれ、震災直後から残された道路に般車両も集中したことから救援活動もままならない状況に陥り、

情報も錯綜して、至る所で混乱をきたしていた。そこで、まず緊急車両等の通行を可能にする救援ルートを確保することが優先事項となった。

余震が続く1月3日、熊谷組は一般社団法人日本建設業連合会を通じて輪島市、穴水町における道路法面崩落および道路啓開作業を、翌4日には珠洲市縄又町から小伊勢町における同作業の要請を受け、すぐさま中能登と奥能登を結ぶ能越道・のと里山海道や国道249号、県道38号、51号、輪島市道1号における崩積土・倒木の処理、陥没箇所の修復、迂回路の整備に取りかかった。

国道249号の緊急対策工事に携わった山崎崇秀は倒木が多く、崩積土も軟弱で重機が搬入できないなど啓開作業は非常に困難でした。それに積雪で道路のクラック（ひび割れ）も隠れてしまっていたので現場は危険な状況でした」と話した。

特にひどかったのは交通状態の悪さで、金沢から輪島まで片道6時間かかったこと、さらに極寒が加わり、現場担当の社員たちの疲弊を痛切に感じたという。



北陸支店土木部 山崎 崇秀

それでも工事は着々と進み、短期間のうちに多くの区間が通行可能となった。しかし国道249号の輪島市と珠洲市を結ぶ逢坂トンネルでは大規模な土砂崩れにより輪島側の坑口が大量の土砂で塞がれ、震災から3か月たっても復旧の見通しが立たないでいた。

この区間を開通させるため、国土交通省による検討を経て、地震で隆起した海岸上に逢坂トンネルの緊急復旧道路（約1.3km）を整備することに決定。同年6月に本格的な工事に着手した。工事は支障となる岩塊等を除去・整形しながら盛土を行い、有効幅員5mで1車線の道路をつくるというもの。現場は地震によつて崩落した法面に近接しており、余震等による再崩落の恐れがある危険な状況の中での作業となった。また現地は波浪の激しい地域であり、海水による浸食を防ぐためにボトルユニットや消波ブロックを設置した。

工事に従事する一人ひとりが細心の注意を払い、最大限の力を発揮して大きな成果が見え始めた。

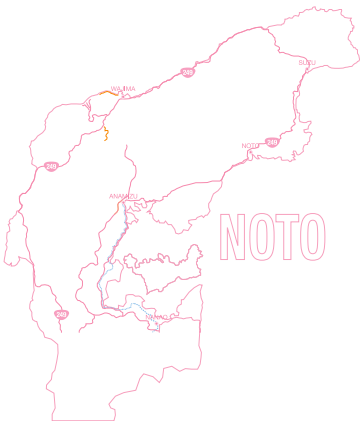
逢坂トンネルの啓開作業に就いた石山正太郎は、当時の工事について「設計図面は標準図しかなくて、とにかく現地合わせて施工を進めるしかなかった」と通常とは異なる進行に戸惑ったという。いかに現場が尋常なものではなかったということである。



北陸支店土木部 石山 正太郎



逢坂トンネル工区の工事状況



NOTO



道路拡幅状況



積雪のなかでの施工状況(国道249号 中屋トンネル東工区)



逢坂トンネル復旧工事施工状況



応急復旧完了



能越自動車道施工状況

それは道路に限らず、数多くの中小河川が氾濫し、それに伴いその流域一帯が大きな被害を受けた。

豪雨のもたらした被害は目に見えるものばかりではない。震災の傷が未だ癒えない地元住民、そしてこれまで復旧工事に携わってきた多くの社員の心にもやりのない重く苦々しい思いを残した。

再び当地を襲った災害は、その後の復旧工事をより困難なものへと変えた。ここまで順調に進められていた「逢坂トンネル」も、構築した緊急復旧道路が一部流出、現場周辺の道路も寸断されるなど再び大きな打撃を受けた。また地震により通行止めが続いていた国道249号「中屋トンネル東工区」の復旧作業にも、甚大な被害をもたらした。

同年9月21日から23日にかけて、石川県能登半島で記録的な豪雨が発生。台風14号から変わった温帯低気圧や秋雨前線、線状降水帯の影響で、奥能登地方を中心に記録的な豪雨となり、気象庁は大雨特別警報を発表。この豪雨により、河川の氾濫や土砂災害が多発し、約1900箇所です砂流出が確認された。仮設住宅の床上浸水などの被害も生じ、地震による土砂崩れはさらにその規模を拡大した。

震災復旧を阻んだ
同年9月の記録的豪雨



豪雨直後の国道249号・八世乃洞門新トンネル周辺



豪雨直後の国道249号・中屋トンネル東工区

豪雨明けからすぐに 復旧作業を開始

しかし熊谷組は、そうした負の気持ちをはなぐり捨て、豪雨明けからすぐに復旧作業を開始した。

「突然震災復興が振り出しに、いやそれ以上のマイナスからのスタートになりました。ところが、気持ちが折れるどころか、かえって使命感ややる気が高まってきて、より一層の団結力ができました」そう誇らしげに話すのは木下北陸支店長だ。また、同支店の渡樹希也からはこんな話を聞いた。

「豪雨災害の際に土砂崩れで道路が分断され立ち往生していた際、地元の人々から食事や避難所の提供など様々な支援をいただきました。そんな地元の人々への感謝を糧に、一日でも早く復旧を完了させようと思いました」



北陸支店土木部 渡 樹希也

自らが被災者である地元住民の人々からの温かな支援も、当地で働く社員たちのモチベーションを再び向上させた要因であることは間違いない。



八世乃洞門新トンネル周辺：啓開完了

豪雨後は道路の啓開作業に加え、氾濫した河川への復旧作業に追われることになった。堆積した土砂や流木を撤去し、応急復旧工事を一日も早く完了させなければ、いつまた次の自然災害が発生するかわからない状況だった。



応急復旧完了



塚田川：被災状況



中屋トンネル東工区：仮設橋梁設置完了



応急復旧完了



真浦川：被災状況



下黒川町（施工中）



町野町（応急復旧完了）



農地被害：長井町（応急復旧完了）

熊谷組が総力を挙げ 経験のない復旧工事に対応

復旧活動を本格的に開始すると同時に、北陸支店はもとより全社から多くの熊谷組社員またはグループ企業が応援に駆け付けた。その誰もが、一心に「一日も早い復興を願うこと」だった。ただ、あまりにも経験のない復旧工事だっただけに、その誰もが戸惑いや不安を抱えながらであったが、それぞれに与えられた業務を全うすることに全身全霊を傾けて臨んだ。

ここで、直接現場での復旧工事に携わってはいないが、後方支援というある意味大事な役割を担っていた山田智佳子に話を聞いた。

「1月2日から出勤し、その日のうちに施工中の現場で被害のあった内灘にある現場（震源地より約140km離れた石川県河北郡内灘町）へ向かい、被害状況などを確認。液状化による深刻な影響で、建物や電柱が傾き、断水も発生していました」

本来なら年末年始休暇中だが、

すでに地震発生翌日から被災地を精力的に動いた。山田は、啓開作業にあたる社員や作業員の宿舍の確保からライフラインの支障により飲み水や食料、生活用品やトイレの水の手配まで、自分ででき得る限りのあらゆる業務を担っていたという。どれひとつとっても、非常時でまともに手に入るものなど少ない状況にありながら、どれほどの労力を有したのか。その苦

労を推し量ることさえ難しい。

「いまでも能登震災に関する復旧工事が続いていますので、自分が出れる事をしています」と平然と話していることに頭が下がるが、「大変な環境（現場）に携わった皆さんの業務の一部が担えたのなら」と話し終えた。

当工事に関わった数知れぬ人たちの思いに込めるように、いくつもの難題を乗り越えて来た結果がいまにある。そういう自負が関わった人の数だけここに存在し、この工事を支えてきたのだ。



北陸支店土木部 山田 智佳子

早期の完全復旧を目指し 継続的な支援を続けて行く

同年12月27日、ついに緊急復旧道路が完成。能登半島を突如襲った震災からほぼ1年、途中予期せぬ豪雨にも見舞われたが、この日、待ちに待った能登の大動脈である国道249号が全線開通し、地元住民や緊急車両に限り通行が可能となった。

令和7（2025）年の夏を迎えた現在も復旧・復興活動は現在進行形だ。多くの被災地では、住宅の修復やインフラ整備が進み、地域の生活は徐々に回復している。地震による影響を受けた公共施設や観光資源も修復・再開され、地域経済の活性化に向けた取り組みが続いている。

豪雨による土砂災害や河川の氾濫も復旧作業が行われ、特に土砂災害防止のための砂防工事や河川の整備が進められて、再発防止策が強化されている。今や、災害に強いまちづくりが推進されていると聞く。

また道路の復旧・整備については、



国道249号逢坂トンネル工区開通（2024.12.27）

国道や県道などの主要幹線道路は被害箇所の修復や通行可能な状態への整備が完了。ただし一部の山間部や沿岸部では、土砂崩れや橋の損傷などにより通行止めや片側通行の箇所が未だにあるが、早期の完全復旧を目指している。

熊谷組は、北陸支店で掲げた災害支援のスローガン『能登 共に歩もう未来へ』を復興の旗印に、被災した地域とそこに生きる人々と共に一丸となつて能登の明るい未来を築くために、これからも能登半島全域の安全と交通の円滑化を強固なものとするよう継続的な支援を続けて行く覚悟である。



国道249号中屋トンネル東工区開通（2025.3.31）

KUMAGAI
UPDATE

87 2025

発行●株式会社熊谷組
発行日●令和7年9月30日
企画●サンケイ総合印刷株式会社
制作●オーシャンデザインワークス

★本誌は再生紙を使用しています。



KUMAGAI GUMI

本誌に関するご意見、お問い合わせは、
熊谷組広報部までお寄せください。

TEL 03-3235-8155 FAX 03-5261-3716
e-mail: info@ku.kumagaigumi.co.jp

<https://www.kumagaigumi.co.jp>



私達は「エコ・ファースト企業」として
環境大臣より認定されています。

